

O. 目次構成

序論	
第 1 章 本研究について	
1-1. 研究背景	
1-2. 研究目的	
1-3. 研究対象著作に関して	
1-4. 研究方法	
1-5. 既往研究	
本論	
第 2 章 翻訳調査および記述内容に対する分析	
2-1. 文献翻訳調査	
2-1-1. 訳出上の注意	
2-1-2. 文献翻訳調査結果	
2-2. 記述内容に対する分析	
第 3 章 シングルススタイルの形成過程に関して	
3-1. 既往研究および著作における記述	
3-1-1. 『世界建築事典』における記述	
3-1-2. 「W.R. エマーソン (1833–1917) の活動からみた シングルススタイルについて」における記述	
3-1-3. 『アメリカン・ハウス・スタイル』における記述	
3-2. 研究対象著作内における記述との比較	
3-2-1. クイーンアン様式とコロニアルリヴァイヴァルの影響 について	
3-2-2. シングルススタイルの形成時期について	
3-3. 小結	
第 4 章 シングルススタイルの形態・空間的特徴に関して	
4-1. 既往研究および著作における記述	
4-1-1. 『世界建築事典』における記述	
4-1-2. 「W.R. エマーソン (1833–1917) の活動からみた シングルススタイルについて」における記述	
4-1-3. 『アメリカン・ハウス・スタイル』における記述	
4-2. 研究対象著作内における記述との比較	
4-2-1. 形態、素材に関して	
4-2-2. シングル材の使用における H.H. リチャードソンの評価	
4-3. シングルススタイルにおける開放性、連続性に関して	
4-3-1. 空間的特徴に関して	
4-3-2. 視覚的特徴に関して	
4-4. 小結	
第 5 章 1880 年以降のシングルススタイルの展開	
5-1. 1880 年以降のシングルススタイルの展開	
5-2. シングルススタイルとニューシングルススタイル	
5-3. シングルススタイルの空間性とアメリカの精神	
考察	
結論	
謝辞	
参考文献・図版出典	



図 1：研究対象著作書影

〈序論〉 本研究について

1-1. 研究背景

中谷研究室では昨年 2018 年度から、諸文化の移入から独自の発展を遂げたアメリカ住宅史の展開過程に対するヴィンセント・スカリーの解釈に触れながら、19 世紀アメリカ独自の住宅様式に関する建築史的意義を解明することを目的に、スカリーによる著作『THE SHINGLE STYLE and THE STICK STYLE』を対象とした翻訳研究を開始した。本論文は同ゼミの翻訳研究の一環として位置付けられるものである。スカリーは彼のいくつかの著作内で、シングルススタイルの建築が 1950 年以降のアメリカの建築家に影響を与えたことを指摘し、特にシングルススタイルからの影響が見られる建築家を「ニュー・シングルススタイル」^(注 1)と呼称した。この世代には R. スターンや C. ムーアといった建築家が含まれており、これはホワイト派、グレイ派の論争^(注 2)のうちグレイ派に属する建築家であった。こうした建築家らがのちにアメリカ国内のみならず日本国内の建築家にも大きな影響を及ぼしたこと考えると、シングルススタイルの形成過程や形態・空間的特徴に関して研究することは、日本における戦後建築史研究としての意義をも持ちうると思われる。

1-2. 研究目的

本研究の目的は、ヴィンセント・スカリーによって書かれた著作『THE SHINGLE STYLE and THE STICK STYLE』の翻訳研究を通して、1) 著者スカリーによって定義された「シングルススタイル」の形態・空間的特徴を明らかにすること、2) シングルススタイルが 20 世紀半ばのアメリカ建築の発展に及ぼした影響に関して考察すること、の 2 点である。

1-3. 研究対象著作に関して

本研究で研究対象著作として位置付けている『The Shingle Style and the Stick Style: Architectural Theory and Design from Downing to the Origins of Wright』(V.Scully, Yale University Press, 1971) は、1840 年から 1885 年までのアメリカ国内における木造建築を対象とした研究である。なお、この著作はスカリーが 1949 年に執筆した博士論文「The cottage style : an organic development in later 19th century wooden domestic architecture in the Eastern United States」(Yale University Department of the History of Art, 1949) を元 に、1971 年にイェール大学出版より再販されたものであるが、これ以前の 1955 年に『The Shingle Style』として出版されている。1955 年版と 1971 年版では、イントロダクションの追加を除いて内容に大きな変更は認められない。

1-4. 研究方法

本論文の主な研究方法は調査対象著作の翻訳および記述内容の分析である。なお、本論文の翻訳研究では、2018 年度からの中谷研究室文献ゼミで翻訳調査が完了した「イントロダクション」以降の 1-9 章の範囲を対象として翻訳を行なった。また翻訳内容に対し、著作内でスカリーによって言及された建築作品に関して、シングルススタイルの形態・空間的特徴を明らかにすることを目的に「言及箇所」、「年代」、「作品名」、「設計者」、「屋根や壁の素材」など 16 項目の要素ごとに言及内容を分析し、表に整理した。このような分析の結果を踏まえ第 3 章以降では、シングルススタイルの形成に影響を及ぼしたと考えられる事項（第 3 章）、分析結果を踏まえたシングルススタイルの形態、空間的特性に関する既往の指摘とスカリーの記述内容の検討(第 4 章)を行なった。また第 5 章では、研究対象著作および他の著作における 1880 年以降のシングルススタイル展開に対するスカリーの認識を述べたのち、第 5 章までで明らかにした内容を踏まえ、シングルススタイルが 20 世紀半ばのアメリカ建築の発展に及ぼした影響に関する考察をおこなった。

1-5. 既往研究

・『アメリカン・ハウス・スタイル』(J.M. ベイカー (著), 戸谷英世 (訳), HICPM 研究所, 1997.12.1)

シングルススタイルを扱った国外の研究に関しては、" Shingle Style" という単語の使用が認められる論文は複数あるものの、シングルススタイルそのものの定義に関して検討を行なっている論文は確認できない。しかしながら、J.M. ベイカー氏による著作『American House Styles: A Concise Guide』(J.M.Baker, W.W.Norton Company, 1994) では、本論文の研究対象著作に基づいてシングルススタイルの形態、空間的特徴が整理されている。この著作に関しては 1997 年に戸谷氏による翻訳版『アメリカン・ハウス・スタイル』が出版されており、本著作では P.131-134 においてシングルススタイルの形成過程とその定義が扱われている。ベイカー氏はシングルススタイルの形成過程におけるクイーンアン様式およびコロニアルリヴァイヴァル様式の流行の影響を指摘しているほか、シングルススタイルの作品の代表的作者として H.H. リチャードソンを位置づけている。シングルススタイルの形態的特徴が図版を用いて具体的に示されており、本論文でシングルススタイルの形態・空間的特徴を検討していく上で参考になるものであり、本論文では特に第 3 章、4 章でベイカー氏の記述内容を取り上げる。

・「アメリカン・クイーンアンとシングルススタイル –W・R・エマーソンの活動からみた一九世紀末米国のラショナルリズム–」(牧田知子, 美学美術史学 (15), 2000.10, p.83 ～ 99)

本研究は国内で唯一シングルススタイルの定義に関して扱っている研究であり、本論文内で牧田氏はシングルススタイルの形態的特徴に関して独自の見解を示している。本論文の研究対象著作に基づいて、ベイカー氏と同様にクイーンアン様式およびコロニアルリヴァイヴァル様式の影響を述べている他、クイーンアン様式をアメリカへと導入した人物として H.H. リチャードソンの名を挙げている。シングルススタイルの空間性に対する牧田氏の認識の特異な点は、クイーンアン様式とアメリカのヴァナキュラー建築の統合過程を W.R. エマーソンの作品を中心に分析することで、シングルススタイルの最大の特徴として形態や空間の「シンプリシティ」を主張している点にある。特に牧田氏はリゾート地におけるクイーンアンとアメリカのヴァナキュラー建築の接近があったことを、シンプリシティが獲得された要因として挙げており、これは本論文第 3 章でシングルススタイルの形成過程を検討する上で参考になる。

・『世界建築事典』(N. ベヴスナー (他著), 鈴木博之 (監訳), 鹿島出版会, 1984.4,10)

本著作は事典であり、P.190 においてシングルススタイルが簡潔に説明されている。なお、本著作ではシングルススタイルの形態・空間的特徴に関して具体的要素は示されていないが、開放的な内部の平面計画をシングルススタイルの最も興味深い特徴として挙げているほか、シングルススタイルの先駆的建物として H.H. リチャードソンの W.S. ハウスが挙げられている。本研究では主に第 4 章で、開放的な内部の平面計画の具体的な内容に関して扱う^(注 3)。

〈本論〉

第 2 章 翻訳調査および記述内容に対する分析

第 2 章では翻訳調査の結果を踏まえ、シングルススタイルの各作品の平面計画や外観の特徴に関するスカリーの指摘内容を 16 項目に分類し表を作成した上で、シングルススタイルの形成過程に影響を及ぼした事項やシングルススタイルの形態・空間的特徴を分析した。

■分析の結果

分析の結果、スカリーは以下の 9 作品をシングルススタイルの傑作として位置付けていることが明らかになった。

- M.D. ハウス, W.R. エマーソン (1879)
- ストートン邸, H.H. リチャードソン (1882-1883)
- W.K. ハウス, B. プライス、(1885)
- C.M. ハウス, マッキム, ミード & ホワイト (1881-1882)
- キングスコート内観, S. ホワイト (1880)
- T. ハウス内観, マッキム, ミード & ホワイト (1881-1882)
- サウスサイド, マッキム, ミード & ホワイト (1882-1883)
- ベルハウス, マッキム, ミード & ホワイト (1882-1883)
- ロー・ハウス, マッキム, ミード & ホワイト (1887)

続いてシングルススタイルの形成過程に関しては、アメリカ独立 100 周年記念の接近に伴うクイーンアン様式の流行および植民地時代の建築への関心の高まりが影響を及ぼしたと考えられること、またクイーンアン様式の流行に関しては H.H. リチャードソンの影響が大きいと考えられることがわかった。またシングルススタイルの形態・空間的特徴に関しては、シングル材の使用を除いては建築の構成要素や素材に関する共通の特徴は特に確認できなかったものの、空間の開放性という空間的特徴が 163 作品中シングルススタイルの傑作である 9 つの作品を含む 35 の作品に対して指摘されていることが明らかになった。

第 3 章 シングルススタイルの形成過程に関して

第 3 章では、第 1 節で既往の研究や辞典における記述内容のうちシングルススタイルの形成過程に関する内容を整理した上で、第 2 節において第 1 節で扱った内容に関連する研究対象著作内におけるスカリーの記述を検証しながら、クイーンアン様式と植民地時代の建築への関心の高まりがシングルススタイルの形成過程に影響を及ぼしたと考えられることを述べた。また第 3 節では、第 2 節の内容を踏まえ、シングルススタイルの形成時期に関する検討を行なった。

■既往研究および著作における記述

『アメリカン・ハウス・スタイル』、「W.R. エマーソン (1833–1917) の活動からみたシングルススタイルについて」におけるシングルススタイルの形成過程に関する記述に、以下のような共通する内容が確認された。

・アメリカ独立 100 周年記念の接近に伴うクイーンアン様式および植民地時代の建築への関心の高まり
・クイーンアン様式のアメリカへの導入における H.H. リチャードソンの影響

■研究対象著作内における記述との比較

上記に関連する内容が研究著作内においても確認されることを示した上で、当時のアメリカ国内の民衆にアメリカ人にとっての文化的根源を求める感情が 1850 年代末にすでに見られたことを、スカリーはクイーンアン様式や植民地時代の建築に関心が向けられた背景として位置付けていることを示した。

■シングルススタイルの形成時期

第 2 節までの内容と、スティックスタイルの形成時期に対するスカリーの認識や、シングルススタイルの成熟時期に関するスカリーの記述を引用しながら、シングルススタイルの形成時期は 1876 年～1880 年であると考えられることを述べた。

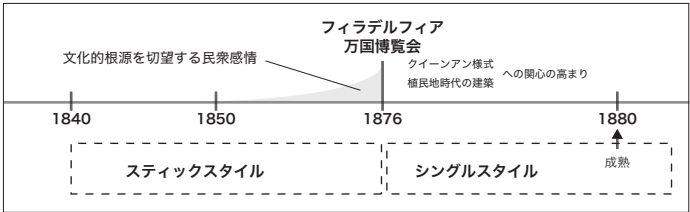


図 2：シングルススタイルの形成における H.H. リチャードソンの影響

第 4 章 シングルスタイルの形態・空間的特徴に関して

第 4 章では、第 1 節で既往の研究や辞典における記述内容のうちシングルスタイルの形態・空間的特徴に関する内容を整理した上で、第 2 節において第 1 節で扱った内容に関連する研究対象著作内におけるスカリーの記述を検証した。また第 3 節では、第 2 節までの内容と第 2 章の分析の結果を踏まえ、シングルスタイルにおける空間の開放性、連続性に関するスカリーの記述内容を検討し、その具体的内容を明らかにした。

■既往研究および著作における記述
『世界建築事典』『アメリカン・ハウス・スタイル』、『W.R. エマーソン (1833–1917) の活動からみたシングルスタイルについて』における形態・空間的特徴に関する記述に共通して確認された特徴は「シングル材の使用」のみであった。また特にペイカー氏、牧田氏は、腰折れ屋根や屋根部分の窓という具体的特徴を指摘していることを述べた。

■研究対象著作内における記述との比較
第 2 章で明らかとなった 7 つのシングルスタイルの作品を主な対象として、上記の内容に関する研究著作内での記述を検討した結果、シングルスタイルの特徴として以下の 2 点が考えられることを述べた。

・シングル材の使用… 7 作品全てにシングル材の使用が認められるが、シングル材の使用が部分的なものにとどまっている作品が認められる
・玄関周辺にポーチ、ベランダ等を用いた平面計画… 7 作品中 6 作品で玄関周辺にポーチ、ヴェランダまたはテラス等を用いた平面計画の実践が確認された

特に第 2 節第 2 項では、研究対象著作内におけるシングルスタイルの使用に関するスカリーの記述を検討し、シングルスタイルの形成における H.H. リチャードソンの影響として、彼が 1874 年に建てた W.S. ハウス (1874) においてクイーンアン様式をアメリカへと導入したことがスカリーによって評価されていることを述べた。

「ショーの用いたイギリススタイルはアメリカでは製造が難しかった。生まれた時から大地にあるが、大抵の場合無視されていた材料であるシングルは、実用的な代替物を提供したのだ。… (中略) …シングルは間違いなくショーが用いたスタイルをアメリカナイズしたものであった。」(『THE SHINGLE STYLE and THE STICK STYLE』, P.15 より)

またその上で、以上のようなスカリーの記述などを踏まえると、W.S. ハウスの意義としてはイギリススタイルの代替物としてシングル材を用いたことであるとスカリーが認識していると考えられることを明らかにした。

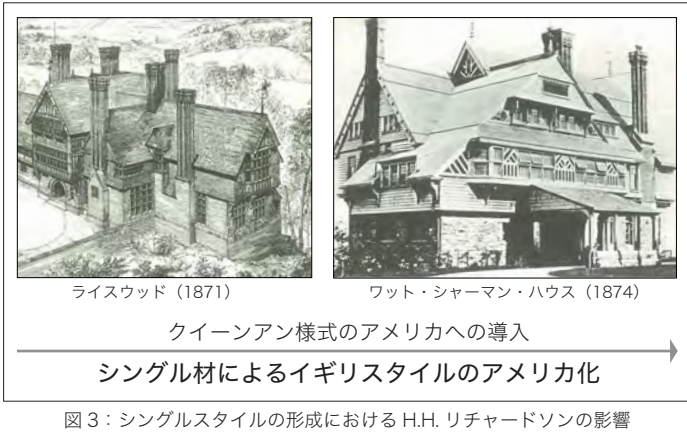


図 3：シングルスタイルの形成における H.H. リチャードソンの影響

■シングルスタイルにおける開放性、連続性に関して
第 4 章第 3 節では、研究対象著作内におけるスカリーの記述を検討することで、シングルスタイルの開放性や連続性に関連する具体的特徴は以下のようなものであると考えられることを明らかにした。

・空間的特徴… 広間と各諸室の緩やかな接続による開放性の創出、ヴェランダやピアツツァによる内部空間の開放性の外部への拡張

・視覚的特徴… 軒天の連続、二階の張り出しによる窓上部の直線的な影、塔などの垂直的要素による対比

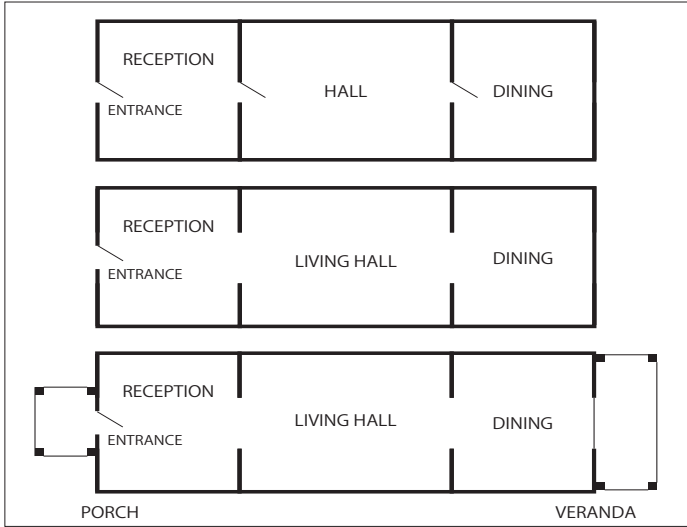


図 4：シングルスタイルの形成における H.H. リチャードソンの影響

「このように、コッドマン計画の大広間は、アメリカ国内における建築計画の新しい流れの最初のものと呼ぶことができ、その起源を発見することは難しいことではない。」(『THE SHINGLE STYLE and THE STICK STYLE』P.7 より)

「これらはアメリカ国内のデザインにおけるリチャードソン流の革新であった。開放的な内部空間への新しい感覚と、その空間を内包する建築表面への新しい感覚である。」(『同書』P.9-10 より)

特に空間の開放性に関連してスカリーは、H.H. リチャードソンによるコッドマン・プロジェクト (1869-1871) をシングルスタイルの空間の開放性における先駆的作品として高く評価していると考えられることを、上記のようなスカリーの記述を元に明らかにした。

第 5 章 1880 年以降のシングルスタイルの展開

第 5 章では、研究対象著作第 7 章～9 章における 1880 年から 1885 年の間のシングルスタイルの発展、またスカリーによる他の著作 (a) 『近代建築』、(b) 『アメリカ住宅論』、(c) 『アメリカの建築とアーバニズム (上)』及び『同書 (下)』における 1885 年以降のシングルスタイルの展開に関するスカリーの認識を述べた。

■1880 年以降のシングルスタイルの展開
研究対象著作内第 7 章～9 章において、1880 年までに空間の開放性を発展させていたシングルスタイルが、1880 年から 1885 年の間に「古典的な秩序」という新たな空間性を獲得したとするスカリーの認識を述べた。特にスカリーは 1880 年から 1885 年における空間の発展においては、B. プライスの交差軸を用いた平面計画の手法に負うところが大きいと考えていることを指摘した。そして 1885 年以降 F.L. ライトによって、この空間の古典的な秩序と、1880 年までに獲得されたシングルスタイルの空間の開放性との統合が図られていったとするスカリーの認識を述べた。

■シングルスタイルとニューシングルスタイル
スカリーによる他の著作では、1876 年～1880 年および 1880 年～1885 年の間に獲得されたシングルスタイルの 2 つの空間性が、

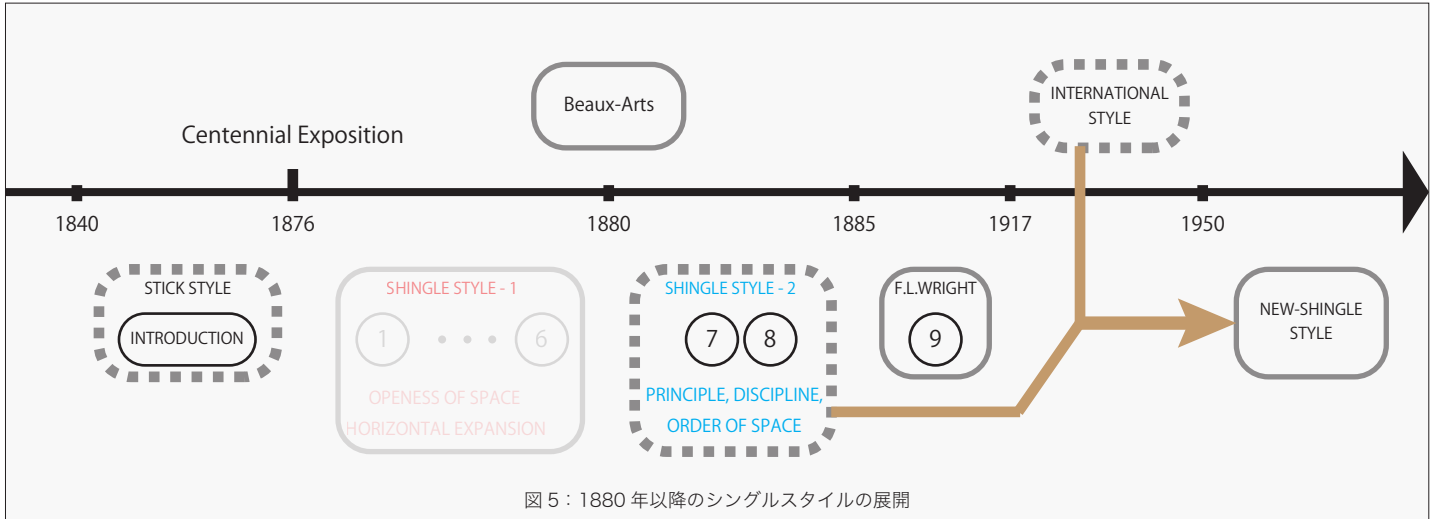


図 5：1880 年以降のシングルスタイルの展開

F.L. ライトによって統合された後、特に 1880 年～1885 年の間に獲得された空間性が 1950 年以降ニューシングルスタイルの世代に影響を及ぼしたこと、またニューシングルスタイルはシングルスタイルの影響とインターナショナルスタイルの影響を統合するという課題と向き合った世代であり、シングルスタイルとニューシングルスタイルの間に、建築家が置かれた時代状況の点で類似性があるとするスカリーの認識を述べた。

■シングルスタイルとアメリカの精神
ここでは本論文の研究対象著作内および他の著作 (a)、(b)、(c) の中で、スカリーによってシングルスタイルの獲得した 2 つの空間性が「自由でありながら同時に保護されたい」という開拓民としてのアメリカの精神性と関係付けられていることを示した。

考察

本研究第 2 章では、シングルスタイルの形態・空間的特徴としてスカリーが、平面計画および空間の開放性という空間性を位置付けていると考えられることが明らかとなった。これと既往研究における記述内容を踏まえ第 3 章および 4 章では、1880 年までにシングルスタイルの発展が成熟を迎え、特にスカリーは H.H. リチャードソンのコッドマンハウス・プロジェクトを高く評価していることを明らかにした。続く第 5 章では、1880 年から 1885 年までの間のシングルスタイルが、空間の古典的秩序という新たな空間性を獲得し、特にこの空間性が 20 世紀半ばのニューシングルスタイルの建築家に影響を与えたとするスカリーの認識を述べた。

以上の内容を踏まえ、シングルスタイルが 20 世紀半ばのアメリカ建築の発展に及ぼした影響を考える場合、シングルスタイルの発展過程に 1876 年～1880 年までの段階 (第 1 段階) と、1880 年～1885 年までの段階 (第 2 段階) が想定されるべきであると考えられること、また本研究の分析の結果明らかとなった第一段階の空間性のみでは、シングルスタイルが 20 世紀半ばのアメリカ建築の発展に及ぼした影響に関して考察することはできず、第二段階の発展過程に関するさらなる研究が必要であることを述べ、これを本論文の考察とした。

結論

本研究の目的 1) に関しては、1876 年から 1880 年までのシングルスタイルの形態・空間的特徴に関しては、「平面計画、空間の開放性」という特徴があげられること、またこれ考えた場合、H.H. リチャードソンのコッドマンハウス・プロジェクトにおける開放的な平面計画の実践が、シングルスタイルの形成過程に影響を与えたものとして高く評価されるべきであることを明らかにできた。しかしながら目的 2) に関しては、本研究で明らかにしたシングルスタイルの形態・空間的特徴が 20 世紀半ばの建築家に影響を与えたとするスカリーの認識については現段階では確認できず、

シングルスタイルが 20 世紀半ばのアメリカ建築の発展に及ぼした影響という観点から考えた場合、シングルスタイルの発展に二つの段階が想定されることを指摘するに留まった。シングルスタイルが 20 世紀半ばのアメリカ建築の発展に及ぼした影響に関して考察するためには、1880 年～1885 年の間におけるシングルスタイルの発展に関する研究を行うことが必要であるとして、今後の研究の展望としたい。

注釈

(注 1) 「ニューシングルスタイル」は、スカリーが『アメリカ住宅論』の中で用いている言葉である。その意味内容は本書の中で明確に定義されていないが、『アメリカ住宅論』内での記載を見る限り、R.ヴェンチュリ、C.ムーア、R.スターンら 20 世紀半ばのアメリカの建築家を指す言葉であると考えられる。
(注 2)：「グレイ派」とは、1970 年代初頭に当時の建築界の潮流を大きく二分していた二つの派閥に対して与えられた呼び名であり、二つの派閥による論争は『a+u』誌上で大きく取り上げられた。各派のメンバーとしてホワイト派にはピーター・アイゼンマン、マイケル・グレイブス、チャールズ・グワスミー、リチャード・マイヤー、ジョン・ヘイダックらが、グレイ派にはロバート・スターン、チャールズ・ムーア、ジャクリン・ロバートソンらが位置付けられていた。
(注 3) シングルスタイルに関する記載が認められる辞典としてこのほか『建築用語辞典 第二版』(技報堂出版、1995.4) 『A DICTIONARY OF ARCHITECTURE / JAMES STEVENS CURL』(Oxford University Press, 1999.) などがあるが、『世界建築事典』における記載内容はこれら辞典における記載内容を含むものであるため本研究ではこの著作を元にシングルスタイルの事典における定義を述べている。
(注 4) (a) 『近代建築』(V. スカーリー (著)、長尾重武 (訳)、鹿島研究所出版会、1972)
(注 5) (b) 『アメリカ住宅論』(V. スカーリー (著)、長尾重武 (訳)、鹿島研究所出版会、1977)
(注 6) (c) 『アメリカの建築とアーバニズム (上)』及び『同書 (下)』(V. スカーリー (著)、香山寿夫 (訳)、鹿島研究所出版会、1973)

図版出典

図 1：筆者作成

図 2：筆者作成

図 3：筆者作成、なお図 3 中のライスウッドおよび W.S. ハウスに関しては『THE SHINGLE STYLE and THE STICK STYLE』を元に筆者作成

図 4：筆者作成

図 5：筆者作成